

# イスラーム哲学の文脈における表象力の語彙変遷史

——イブン・シーナーにおける内的感覚論の形成——

小 村 優 太

## はじめに

本論文はイスラーム哲学の文脈における表象力の語彙変遷史を辿りながら、それがイブン・シーナー Ibn Sīnā (980-1037) の内的感覚論形成にどのような影響を与えたかを明らかにする。ペリパトス派における表象力 *φαντασία* は主にアラビア語で *wahm* と *takhayyul* と訳され、*wahm* はキンディー al-Kindī (870 以降歿) の学派、*takhayyul* はバグダード学派が使用していた。しかしイブン・シーナーにおいて *wahm* は動物や人間が好ましい対象と避けるべき対象を弁別する「判断力」、*takhayyul* は様々な形相を組み合わせたたり分離したりする能力であり、ラテン語ではそれぞれ *aestimatio*, *imaginatio* と翻訳され<sup>1)</sup>、この概念は彼の独創とされる<sup>2)</sup>。本論文前半では *φαντασία* からイブン・シーナーの *wahm*, *takhayyul* に至る流れを追い、後半では、それらが彼の処女作『魂論摘要』*Mabḥaṭh ‘an al-quwā al-nafsāniyyah* において如何に結実したかを明らかにする。

---

1) トマス・アクィナス Thomas Aquinas (1225-1274) は『神学大全』*Summa Theologiae* 第1部第78問題第4論考で、イブン・シーナー/アヴィセンナ Avicenna が『治癒の書』*Kitāb al-Shifā’* 「魂について」*Fr al-nafs/De Anima* で五つの内的感覚、共通感覚 (*sensus communis*)、ファンターシアー (*phantasia*)、表象力 (*imaginativa*)、判断力 (*aestimativa*)、記憶力 (*memorativa*) について述べているとしている (Aquinas 1952, 380)。

2) アラブ、ヘブライ、ラテンにおける内的感覚の成立史については、Wolfson の研究が詳しい (Wolfson 1935)。本論文も Wolfson の研究に大きな示唆を受けた。またイブン・シーナーにかんしては Black の研究が挙げられる (Black 1993; 2000)。

## 1. アリストテレス『魂について』敷衍の *wahm* とキンディーによる 四つの用語

*Wahm* は本来アラビア語で「空想」や「妄想」を指す一般語である。これが哲学史に現れた時期は正確に同定出来ないが、最初期の例としてアリストテレス Ἀριστοτέλης (BC384-322) 『魂について』 Περὶ Ψυχῆς の著者不明のアラビア語敷衍が挙げられる。バグダードの書店主イブン・アルナディーム Ibn al-Nadīm (995/998 歿) 『目録集』 *Kitāb al-Fihrist* によれば、これはイブン・ビトリーク Ibn al-Biṭrīq (800 頃歿) の編集版が基になっている可能性が高い<sup>3)</sup>。『敷衍』第三巻は共通感覚と表象力 (*wahm*) の説明で始まっており<sup>4)</sup>、表象力 φαντασία の訳語として *wahm* が使われていることが分かる。

また最初のアラブ人の哲学者と言われ、アッバース朝に仕えたキンディーは、『諸物の定義と描写について』 *Fī ḥudūd al-ashyā' wa-rusūm-hā* と『睡眠と夢の本質について』 *Fī māhiyyah al-nawm wa-l-ru'yā* で次のように述べている。

表象力 (al-tawahhum) : ファンターシヤー (al-fanṭāsiyā) のこと。魂の能力であり、感覚的形相を、その質料がないときにも動かす原因である。それはファンターシヤー、つまり表象力 (al-takhayyul) と言われ、それは感覚された事物の形相が、その質料がないときにも現存することである<sup>5)</sup>。

表象力 (muṣawwirah) と呼ばれる能力、つまり我々に質料なしに——つまり諸形相を宿したものが我々の感覚から消え去っても——個体的諸物の諸形相を与える能力があり、それを古のギリシアの賢人たちはファンターシヤー (al-fanṭāsiyā) と呼んだのである<sup>6)</sup>。

3) この敷衍版の詳細については Arnzen の記事が詳しい (Arnzen 2003)。

4) Anonymous, 293. とはいえ同書で共通感覚に割かれた紙面は欠落しており、実質的に『敷衍』の第三巻は表象力の説明で幕を開ける。

5) al-Kindī 1953, 167.

6) al-Kindī 1953, 295.

つまりキンディーは *tawahhum*<sup>7)</sup>, *fanṭāsiyā*, *takhayyul*, *muṣawwirah* が表象力を指すほぼ交換可能な言葉として使用しているのである。また彼は表象力や知性が脳に宿るとし<sup>8)</sup>, ガレノス *Γαληνός* (129-200 頃) の影響を見ることが出来る<sup>9)</sup>。キンディーが利用可能だった資料は不明だが、ある時期以降『魂について』敷衍を参照出来たと考えられる<sup>10)</sup>。

## 2. バグダード学派による *takhayyul*

一方でキンディーと同時期からやや後にバグダードで活躍したネストリウス派キリスト教徒のフナイン・イブン・イスハーク *Ḥunayn ibn Ishāq* (809-873) とイスハーク・イブン・フナイン *Ishāq ibn Ḥunayn* (830-910 頃) 親子はキンディーと別のグループ、バグダード学派を形成していた<sup>11)</sup>。医者でもあったフナインは『目にかんする十章の書』*Kitāb al-'ashr maqā-lāt fī al-'ayn* の中で、次のように述べている。

統括能力 (*al-siyāsah*) は「脳が他の器官を使用することなく」自らで「統括能力の」活動をおこない、統括能力は三つの事物を含む：表象力 (*al-takhayyul*) と思考力 (*al-fikr*) と記憶力 (*al-dhikr*) である。そして表象力は脳の前方「の空腔」にあり、思考力はその中央に、記憶力はその後方にある<sup>12)</sup>。

フナインもキンディーと同じく表象力や思考力が脳に宿るとしている。更に、脳の三つの空腔それぞれに能力が宿るとするのはガレノス『罹患する部分』*De Locis Affectis* の構図である<sup>13)</sup>。フナインはキンディーの同時

7) *wahm* の語根 *w-h-m* の動詞 V 型動名詞で、意味は *wahm* とほぼ同じ。

8) *al-Kindī* 1953, 297-298.

9) 註 12 参照。

10) キンディーは『魂について』敷衍をある時期に読めたはずだが、彼のいくつかの魂論著作は『魂について』の理論を取り入れていないことが指摘されている。また『睡眠と夢の本質について』から、彼はアリストテレスの『自然学小品集』*Μικρά φυσικά* も知っていたと考えられる (*Adamson* 2007, 27)。

11) フナインとイスハークの親子は、キンディーと政治的に対立していたバヌー・ムーサー *Banū Mūsā* 兄弟をバトロンに持ち、翻訳を行っていた (*Endress* 1997, 47-49)。またバグダード学派は、キンディー学派に対立する概念としても説明される (*Adamson* 2007, 12-17)。但し *Endress* はこれらを「学派」と見ることに反対している (*Endress* 1997, 49)。

12) *Meyerhof* 1928, 86.

代人だが、表象力を指すのに takhayyul を使用し、wahm や fanṭāsiyā は使わない。またその息子イスハークはテミスティオス Θεμιστιος (317-390 頃) の『魂について』 Περὶ Ψυχῆς をアラビア語訳したが、それでも「この感受 (al-infi'āl = πάθος), つまり表象 (takhayyul = φαντασία) は、我々が望んだ時に、我々は我々の魂をそこに落とし込むことが自由に出来る」<sup>14)</sup>と訳されている。彼はアリストテレス『魂について』のアラビア語訳も行っており (散逸)、イブン・シーナーが晩年に書いた『魂について』欄外註 *al-Ta'liqāt 'alā ḥawāshī kitāb al-naḥs li-aristū* は大部分イスハーク版を底本とし、それによると φαντασία は takhayyul と訳されている<sup>15)</sup>。バグダード学派の翻訳作品をキンディーがどの程度読むことが出来たのかは疑問である。フナインはキンディーとほぼ同年代であるが、キンディー歿時には40歳ほどのイスハークが、それまでにどの程度の翻訳を行っていたのか、またそれらをキンディーが見ることが出来たのかは不明である。

### 3. ファーラービーの takhayyul とアーミリーの wahm

バグダード学派の主要人物の一人にファーラービー Abū Naṣr al-Fārābī (950 歿) がいる。キリスト教徒が多いバグダード学派の中で珍しくムスリムだった彼は、イブン・シーナーにも大きな影響を与えた<sup>16)</sup>。彼はその著書『有徳都市の住民の諸見解』*Mabādi' ārā' ahl al-madīnah al-fāḍilah* の中で以下のように述べている。

それから人間のうちに、感覚対象から彼の魂に刻印されたものを、

13) Galenus 1824, 174-5; 英訳 Galen 1976, 87. 『目録集』によるとガレノスの著作の多くはアラビア語訳されており、更にフナインはアリー・イブン・ヤフヤー 'Alī ibn Yaḥyā への手紙のなかで、『内的諸器官の病気の解明について』*Fī ta'arruf 'ilal al-a'ḍā' al-bāṭinah* について述べ (『罹患した部分』の別名)、それはレーシュアイナのセルギウス Sirjis/Sergius of Reshaina (536 歿) がシリア語に酷い翻訳を行ったが、フナイン自身が後に二度シリア語に翻訳し直し、その後イスハーク・イブン・スライマーン Ishāq bn Sulaymān (イサク・イスラエリ Isaac Israeli ben Solomon (832 頃-932 頃) のことか?) のためにアラビア語に翻訳したと述べている (Ḥunain Ibn Ishāq 1925, Arabic 11-12)。

14) Themistius 1973, 155; ギリシア語原文 Themistius 1899, 88; 英訳 Themistius 1996, 111-112.

15) Frank 1958-1959, 244.

16) イブン・シーナーがファーラービーの著作を読んでアリストテレス『形而上学』の意図を理解出来たというエピソードを思い起こすと良い (Gohlman 1974, 32-34)。

魂の持つ諸感覚の視界から感覚対象が消えてからも保持するべつの能力が生じる。これは表象能力 (al-quwwah al-mutakhayyilah) という。これ (表象力) によって, [人間は] ある感覚対象と他の感覚対象を, 様々に組み合わせたり分離したりする。[その組み合わせや区別の] あるものは間違いで, あるものは正しい<sup>17)</sup>。

バグダード学派は基本的にガレノスの影響を強く受けているが, ファーラービーは脳よりも心臓を重視しており<sup>18)</sup>, これはむしろアリストテレス自身の説に近い。一方, 表象力の働きとして, 感覚対象同士を組み合わせたり分離したりする能力を挙げているが, これはテミスティオスの影響を受けていると考えられる<sup>19)</sup>。またファーラービーは表象力を表すのに takhayyul を使い, wahm は決して使用しない。この用語法は弟子であるヤコブ派キリスト教徒のヤフヤー・イブン・アディー Yahyā ibn 'Adī (893-974) にも受け継がれている<sup>20)</sup>。

バグダード学派がバグダードのキリスト教徒を中心としていたのに反し, キンディー学派はホラーサーンなど周縁地域出身のムスリムを中心に広まった<sup>21)</sup>。ホラーサーンのサーマーン朝に仕え, プハーラーで歿したアーミリー Abū al-Ḥasan al-'Āmirī (992 歿) もその一人である。彼は『死後の世界について』*Kitāb al-amad 'alā al-abad* で, 次のように述べている。

感覚的魂が知 (irfān) を得ることについて言えば, 感覚による認識のように, 身体的な道具によって生じるか, もしくは表象力 (wahm) による表象行為 (takhayyul) のように, 身体的な道具なしで生じるかのどちらかである。そして身体的な道具によって, 人間は現存する諸事物同士を識別し, [身体的な] 道具なしに, 人間は現存しない諸事物同士を識別する。人間がこれら二つの識別を獲得するの

17) al-Fārābī 1985, 103-104.

18) al-Fārābī 1985, 168.

19) Themistius 1973, 88-89.

20) 彼は『論理学における四つの問題について』*Fī al-buḥūth al-arba'ah al-'ilmiyyah 'an ṣanā'ah al-mantiq* で表象能力に quwwah al-takhayyul という用語を用いている。但し注目すべきことに, 彼はファーラービーの弟子であるが, フナインと同じく思考の中心を脳としており, ガレノスの理論を採用している (Yahyā ibn 'Adī 1956, 100)。

21) Adamson 2007, 12-17. 但し, 言うまでもなくキンディー自身が活躍したのはバグダードである。

は、認識的な感受によってである。(……) さて感覚的魂は、活動 (fi'l) と知 ('irfān) という二つの能力から成るが、この二つの能力は互いに異なっている。その証拠に、欲望の喚起は肝臓に、気概の沸騰は心臓に、識別を得るのは脳の諸部分に関連付けられている<sup>22)</sup>。

ここで彼は表象力を表すために wahm を使用し、takhayyul を名詞ではなく、動名詞的に使い、両者を区別している。キンディーの孫弟子であるアーミリーが wahm と takhayyul の両方を使用するのは当然だが、wahm を能力、その働きを takhayyul と分けているのは注目すべきである。また肝臓、心臓、脳に関しては、プラトン Πλάτων (BC427-347) の『ティマイオス』 *Tímaios* を思い起こさせる<sup>23)</sup>。

#### 4. 純正兄弟団による takhayyul と脳モデル

そしてこの流れに、イスマール派の流れを汲むとされる純正兄弟団 Ikhwān al-Ṣafā' の『書簡集』 *Rasā'il Ikhwān al-Ṣafā'* を付け加えることが出来る<sup>24)</sup>。『書簡集』は980年頃までには人口に膾炙していたと思われ<sup>25)</sup>、980年生まれでイスマール派の宣教師たちが自宅に出入りしていたイブン・シーナーに何らかの影響を与えたと考えられる<sup>26)</sup>。彼らの『書簡集』「人間は小さな世界であることについて」 *Fī anna al-insān 'ālam ṣaghīr* では次のような内的感覚論を展開している。

知るがよい。人間の魂は〔外的な五感と〕別の五つの能力を持っており、それらの魂への関係性は、先ほど述べたこれら〔外的な〕五つのものの関係性と違っており、肉体の器官におけるその効果は、これらのもの(=外的な五感)の効果と違っており、それらの諸活動はこれら〔外的な五感〕の諸活動とは似ていない。なぜならこの五つは、

22) Rowson 1988, 92.

23) プラトンのイスラーム世界に対する影響はアリストテレスほど直截的ではない。しかしガレノスによる『ティマイオス』敷衍がイスハーク・イブン・フナインによってアラビア語訳されており、いくつかの作品は知られていた (Galenus 1951)。

24) イスマール派、ペリパトス派、新プラトン主義、ヘルメス主義など、『書簡集』では多種多様な混淆思想が展開されている。Walker は彼らを「何らかの形でイスマール派である (being somehow Ismā'īlī)」と述べている (Walker 2005, 77)。

25) de Callatay 2008, 81.

26) Gohlman 1974, 18.

知得対象の形相を受け入れるさいに協力し合う仲間同士のようなものであり、そのうちの三つの魂への関係は、王と、常に彼の傍に侍り、彼の秘密を見て、彼の活動の特質を助ける幫間たち (nudamā) の関係のようなものである。それは脳の前部を流れる表象能力 (al-quwwah al-mutakhayyilah) と、脳の中部を流れる思考能力 (al-quwwah al-mufakkirah) と、脳の後部を流れる記憶能力 (al-quwwah al-khāfiḡah) のことである。そのうちの [他の] 一つの魂への関係は、王と侍従 (ḡajib) や通訳 (turjamān) の関係のようなものである。それは魂 [の考えていること] を表現し、そこから魂の思考のうちにある知識や重要事の意味を [外部に] 伝達する発話能力 (al-quwwah al-nātiqah) である。それは喉のなかを舌に向かって流れている。そのうちの [他の] 一つの魂への関係は、王と、彼が王国の統治と臣民の管理を任せさせた大臣 (wazīr) の関係のようなものである。その能力によって魂はあらゆる筆記や技術を明らかにし、それは両手指のうちを流れている。これら五つの能力は知得対象の形相を受け入れる点において協力し合う者のようである<sup>27)</sup>。

ここでは takhayyul と同語根の mutakhayyilah が使用されており、語彙上はバグダード学派との近似性が見られる。また、脳の前部、中央、後部それぞれに能力を当てはめるという構造はフナインなどに見られるガレノス型内的感覚であり、この構造が汎く伝わっていたことが分かる<sup>28)</sup>。ここで特筆すべきは、脳に宿る三つの能力以外に、口に宿る発話能力と、手指に宿る技術の能力が追加されていることである。また人間の諸能力を王国の宮廷に擬えており、これは最初期のイブン・シーナーにも影響を与えている<sup>29)</sup>。

##### 5. イブン・シーナー『魂論摘要』の内的感覚論

以上のような知的風土の中でイブン・シーナーは独自の哲学を形成していった。まずファーラービーは彼の思想形成に多大な影響を与えた。また

27) Ikhwān al-Ṣafā' 1886, 468.

28) フナイン以外に、アブー・バクル・ラージー Abū Bakr al-Rāzī (854-925) も著書『マンスールの医学書』*Kitāb al-mawsūm bi-l-Manṣūrī fi al-ṭibb* で同様の構造を採用している (al-Rāzī 1903, 46)。

29) イブン・シーナー『魂論摘要』にも同様の記述が見られる (Ibn Sīnā 1952, 160)。

同じブハーラー在住で、彼が10代のときに亡くなったアーミリーの著作にも触れていた<sup>30)</sup>。更に『純正兄弟団書簡集』を若いイブン・シーナーが読んだ可能性は極めて高い。つまり彼はバグダード学派、キンディー学派、純正兄弟団の全てに触れることが出来たと考えられる。

イブン・シーナーの内的感覚論を検討する場合、大抵は中期の代表作である『治癒の書』や『救済の書』*Kitāb al-najāh* の記述が参照される<sup>31)</sup>。しかし彼の哲学体系はその40年近くに及ぶ著作活動において様々な内的発展を遂げており、内的感覚論についても例外ではない。そのため、これまで見てきた先人たちの議論がいかにして彼のうちに結実したかを検討するためには、彼が17歳のときに書いた処女作『魂論摘要』を検討する必要があるだろう。同書第7章は内的諸感覚についてであり、そこには以下のように書かれている。

また哲学者アリストテレスによれば、心臓はあらゆる能力の源であるが、それらの支配領域は様々 [に異なった] 道具のうちにある。外的諸感覚の支配領域は、すでに知られた [身体的な] 道具のうちにある。形相把握力 = 共通感覚 (al-mutaṣawwirah)<sup>32)</sup> の支配領域は、脳の前方の空腔にある。表象能力 (al-mutakhayyilah) の支配領域は、(脳) の中間の空腔にある。記憶能力 (al-mutadhakkirah) の支配領域は脳の後方の空腔にある。判断力 (al-mutawahhimah) の支配領域は脳全体、そのなかでも特に表象の領野にある。そして空腔が受けた傷 [の箇所] に応じて、これら諸能力の活動は影響を被る<sup>33)</sup>。

ここで分かるのは、(1) イブン・シーナーは表象力などの内的諸感覚が脳に宿るとしていること、(2) 彼の採用している構造はバグダード学派のガレノス型の感覚論や純正兄弟団のものに類似していること、(3) ガレ

30) 主に敵意によってではあるが (Rowson 1988, 28)。

31) たとえば Black が論文において検討しているのは (Black 1993; 2000)、基本的に『治癒の書』と『救済の書』で展開されている内的感覚モデルであり、それらを「規範的 (canonical)」なものとしている (Black 1993, 219)。無論 Black は後代のラテン哲学者たちとの比較を行っているため (とりわけ Black 2000)、ラテン語に翻訳された『治癒の書』を中心に論じるのは当然であるが。

32) 語義的には形相把握力のことであるが、その前の箇所、形相把握力と共通感覚 (al-ḥiss al-muṣhtarik) は同一であると言われている (Ibn Sīnā 1952, 166)。

33) Ibn Sīnā 1952, 167.



ノス型の表象力、思考力、記憶力という構図が共通感覚、表象力、記憶力という構図に変わっていること、(4) 脳の三つの空腔に加え、脳全体に宿る判断力<sup>34)</sup>を追加しているということである。

(1) は、イスラーム哲学はガレノスを重視しており、ファーラービー以外は基本的に脳を重視しているため、医者でもあったイブン・シーナーがガレノスの脳モデルを採用するのは不思議なことではない。但し彼はアリストテレスによる心臓モデルも併用しており、能力の源泉として心臓を置いている。(2) は、(1) と同じく彼がガレノスの医学に親しんでいたこと、純正兄弟団の著作に触れていた可能性が高いことから説明出来るだろう。(3) は、同著で「表象能力は、判断力が単独で使用すると、この名前、つまり表象能力と呼ばれる。そして理性的能力が使用すると、思考能力 (al-mufakkirah) と呼ばれる<sup>35)</sup>」と述べられるため、思考力が削除されたわけではなく、またイスラーム哲学ではずっと顧みられなかった共通感覚を彼が復活させたため<sup>36)</sup>、思考力を理性的能力の側に近づけ表象力の一様態とすることによって三つの空腔という構造を維持したのであろう。(4) は、これ以降のイブン・シーナーの内的感覚論の標準となった判断力だが、その起源の決定的な証拠は存在しない<sup>37)</sup>。つまり彼は基本的にガレノスを

34) この能力 (wahm = mutawahhimah) の訳語は多様である。ラテン語 aestimatio の訳語としては「評価力」、「評定力」が一般的だが、『治癒の書』「魂論」で、この能力の働きは「判断する (yahkumu)」こととされるため (Ibn Sīnā 1975, 162)、私は判断力という訳語を充てた。『治癒の書』「魂論」の和訳者木下は wahm を表象力、takhayyul を想像構成能力と訳し、「評価ということばは知性との結びつきを連想させるし、すぐ後に説かれるように、この能力には想像構成能力に似たはたらきがあるため、評価力といったような訳語は避けた」としている (イブン・シーナー 2012, 54)。しかしイブン・シーナーの wahm 概念は従来の表象力と合致せず、また『魂について』欄外註によれば、彼は φαντασία の訳語を takhayyul として理解していたことが分かる。

35) Ibn Sīnā 1952, 167.

36) Wolfson 1935, 95.

37) Landauer は、判断力が意見 (ẓann) とも呼ばれることに鑑みて、アリストテレスの δόξα が起源だとする (Landauer 1875, 401)。しかしイブン・シーナーの判断力は動物にも生じるが、アリストテレスの δόξα は人間のみの能力である。Wolfson は Landauer の説を批判し、判断力の起源をアリストテレス『自然学』Φυσικῆς ἀκρόασις の「本性 (φύσις)」としている (Wolfson 1935, 90)。しかしイブン・シーナーは後に『治癒の書』で、蟻や蜂が巣を作るのは「靈感 (ilhām)」のためであり、またこのような行動は個体でなく種の要請に従ったものであるとする (Ibn Sīnā 1975, 182)。そして Rahman は、wahm は φαντασία の多様な働きの一側面を言っているに過ぎないとする (Ibn Sīnā 1959, 79-81)。Black はこれを受け、『魂について』欄外註における「ここで表象力 (al-takhayyul) の名のもとに集結しているものは、能動的な諸能力に分割される。たとえば判断力 (al-wahm)、

起源とするバグダード学派的な脳の三つの空腔モデルを採用しながら、そこに共通感覚を組み込み、第四の能力として判断力を付け加えたと考えられる。

## 6. イブン・シーナーによる表象力 (takhayyul) と判断力 (wahm)

それでは、イブン・シーナーの表象力と判断力がどのような働きをする能力なのか見てみることにしよう。

表象力は「共通感覚に集まった形相を組み合わせたり分離させたりし、形相を共通感覚から引き離すことなくそれらの違いを措定<sup>38)</sup>」するが、その認識は「間違いや嘘、または感覚からはその形が取得されないものを把握することもあり得る<sup>39)</sup>」と言われる。表象像の構築、分離作用という説明は takhayyul という用語と併せ、即座にファーラービーを思い起こさせる。つまりここにおける表象力はバグダード学派によるテミスティオス、ファーラービー的なものをそのまま移入していることが分かる。

一方で判断力は表象力ほどには直接の起源が明白でない。それは「それがこうであるか、こうでないか確定して物事を判別する能力があり、この能力によって動物は危険を回避し、望ましいものへと向かう<sup>40)</sup>」と言われ、また形相把握力は「感覚から取得したものに従って太陽の円盤の大きさを把握する<sup>41)</sup>」が判断力はそうでない。また表象力は感覚対象の外的な情報と逆の判断をすることもあり、それがこうだという確信を持たずに活動するが、判断力は「猛獣が遠くに小鳥ほどの大きさの獲物を発見すると、獲物の像や大きさは不明瞭であっても、[判断力に従い] 獲物に向かう<sup>42)</sup>」。また記憶力を説明する箇所、以下のようにも述べられる。

それから動物のうちには、例えば狼は敵で、子供は愛すべき親族だというような、感覚によって認識された意味 (ma'āni) を保持しておく能力がある。この能力が形相把握力と違うのは明らかである。つま

思考力、そして形相保持力や記憶力などの保持力に」(Ibn Sīnā 1947, 98) を援用する (Black 1993, 248)。しかし最晩年に書かれたとされる『欄外註』と同じ理論が処女作に適用できるかは不明である。

38) Ibn Sīnā 1952, 166.

39) Ibn Sīnā 1952, 166.

40) Ibn Sīnā 1952, 166.

41) Ibn Sīnā 1952, 166.

42) Ibn Sīnā 1952, 166.

り、諸感覚によって獲得された形相以外は形相把握力のうちにないのである。それから諸感覚は狼の敵対性や子供の可愛さ〔といった意味〕ではなく、狼の姿や子供の外見を感覚するのである。可愛さや危険性を獲得するのは、判断力 (al-wahm) だけであり、それから両者 (可愛さや危険性) はこの能力に貯蔵されるのである。またこの能力 (= 記憶力) が表象力ではないのは明らかである。つまり表象力は、判断力が認可したり信用したり諸感覚から推察したりしたもの以外を表象し得るのである。一方でこの能力は判断力が認可したり信用したり諸感覚から推察したりしたものしか把握しない。またこの能力 (= 記憶力) は判断力でない。つまり判断力は、他のものが信じたものを保持するのではなく、むしろ判断力自体で信じるのである。一方この能力 (= 記憶力) は、自らが信じるのではなく、他のものが信じたものを保持するのである。この能力は保持能力 (al-ḥāfiẓah), または記憶力 (al-mutadhakkirah) と呼ばれる<sup>43)</sup>。

感覚によって認識された狼や子供の外見の表象像を認識するのが表象力であり、外見からは分からない敵対性や可愛さといった「意味 (ma'nā)<sup>44)</sup>」を認識するのが判断力であるとされる<sup>45)</sup>。つまり『魂論摘要』における内的感覚の構造は、外的な五感によって認識された感覚情報がまず脳の前部にある共通感覚 = 形相保持力に流れ込み<sup>46)</sup>、そこに蓄えられた感覚的形相が脳の中央にある表象力によって操作され、様々に組み合わせられたり分離されたりする。そして脳全体を使用する判断力は、この形相に附随する意味を認識し、この意味は脳の後部にある記憶力に保持されるのである。そして表象力が判断力によって行使される場合、表象力は表

43) Ibn Sīnā 1952, 167.

44) この語はラテン語で *intentio* と翻訳される。アラビア語において *ma'nā* は「意味」であるが、Black はこの語を「志向性 (intentionality)」と訳す (Black 2000, 60)。

45) 判断力 (al-mutawahhimah) という用語の名称はキンディー学派の *wahm* を基にしていると考えられ、語彙上の直接の源泉にはアーミリーが挙げられるだろう。しかしその内実はきわめて広範で、ただ一つの起源を措定することは現時点では困難である。

46) イブン・シーナーの注記作品『始原と帰還』*al-Mabda' wa-l-Ma'ād* において形相保持力の別名として想像力 (al-khayāl) が与えられ、感覚的形相の受容能力 (= 共通感覚) と保持能力 (= 形相保持力) が明確に分けられる (Ibn Sīnā 1984, 93)。しかし『魂論摘要』段階において共通感覚と形相保持力は同一のものとされる。Black はイブン・シーナーの内的感覚構造を、能動的な表象力と、形相と意味それぞれの受容器官と保持器官四つの計五つと説明しているが (Black 2000, 59-60)、この段階においてその構造はまだ明確でない。

象力として機能するが、理性的能力（＝知性）によって行使される場合、それは思考力と呼ばれる<sup>47)</sup>。

例えば羊が狼を見たとき、狼の視覚情報が目から共通感覚に送られ、それから狼の感覚的形相が表象力で結合・分離される。そのとき狼の形相を取り扱うのが表象力であり、狼の外見から抽出不可能な敵対性などの「意味」を取り扱うのが判断力である。もし狼を見たのが人間であれば、知性が表象力を司ることによって表象力は思考力となり、狼の知的形相（＝感覚的表象を捨象した定義）を取り扱うことが出来る<sup>48)</sup>。その後、形相は共通感覚＝形相保持力に、意味は記憶力に蓄えられるのである。

「感覚的形相を取り扱う表象力」、「意味を取り扱う判断力」という対比に目を向ければ、イブン・シーナーが判断力という新たな能力を導入した理由の一端が明らかになると思われる。彼は感覚的形相の持つ内容を外的な特徴に由来するものとし、外的な特徴から判別できない内容を持つ「意味」を感覚的形相から明確に分離したのである。そのため表象力とは別に、意味を取り扱う能力が必要とされたのだろう。

### おわりに

アリストテレス『魂について』における表象力 *φαντασία* は、キンディイ学派の *wahm*、バグダード学派の *takhayyul* という訳語を範例とし、その二つがイスラーム哲学における主要な訳語として並立していた。またそこには、脳を中心とするガレノス型内的感覚モデルや、純正兄弟団によるマクロコスモスとミクロコスモスの照応関係が存在した。これらの要素が混然一体となりながらイブン・シーナーに流れ込み、彼の中で新たな内的感覚論として形成していったのである。構図のみに着目すれば、彼の内的感覚論はガレノス的な脳の三つの空腔モデルを基礎とし、そこに判断力という新たな能力を付け加えたものであった。その際、表象力には *takhayyul* が、判断力には *wahm* が用語として充てられたのである。しかし彼の内的感覚論は、表象力と判断力を別個の能力として明確に区別し、感覚的形相と意味という、同一の対象から認識される異なった側面を受け

47) ここで判断力と知性の半ば類比的な構図が作られている。『魂論摘要』では明示的に述べられないが、『治癒の書』でイブン・シーナーは明確に、判断力が動物における最大の判別能力であると述べている (Ibn Sīnā 1975, 162)。

48) 『魂論摘要』では明確に述べられていないが、イブン・シーナーによれば知的形相は記憶力などの身体的器官に保持されない (Ibn Sīnā 1975, vol. 5 ch. 6)。

持たせることで、従来よりも更に複雑なモデルを提示している。しかし彼の新たな内的感覚論や、表象力と判断力の区別などは突然変異的に現れたものでなく、アリストテレスに淵源する哲学史の流れに立脚したものである。

#### 文献目録

- Adamson, Peter. *Al-Kindī*. Oxford: Oxford University Press, 2007.
- al-Fārābī, Abu Nasr. *On the Perfect State*. Edited by Richard Walzer. Chicago: Great Books of the Islamic World, Inc., 1985.
- al-Kindī. *Fī ḥudūd al-ashyā' wa-rusūm-hā*. Vol. 1. In *Rasā'il al-Kindī al-Falsafīyyah*, by al-Kindī, edited by M 'A. H Abū Rīda, 165-180. Cairo: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1953.
- al-Kindī. *Fī māhiyyah al-na'wam wa-l-ru'yā*. Vol. 1. In *Rasā'il al-Kindī al-Falsafīyyah*, by al-Kindī, edited by M 'A. H Abū Rīda, 293-311. Cairo: Dār al-Fikr al-'Arabī, 1953.
- al-Rāzī. "al-Kitāb al-mawsūm bi-l-manšūrī fi al-ṭibb li-muḥammad ibn zakariyyā al-rāzī." In *Trois Traités d'Anatomie Arabes*, translated by Pieter de Koning, 2-89. E. J. Brill: Leiden, 1903.
- Anonymous. *Aristoteles' De Anima. Eine verlorene spätantike Paraphrase in arabischer & persischer Überlieferung Arabischer Text nebst Kommentar, quellengeschichtlichen Studien & Glossaren*. Herausgeber: Rüdiger Arnzen. Leiden: Brill, 1998.
- Aquinas, Thomas. *Summa Theologiae Pars Prima et Prima Secundae*. Edited by Petrus Carmello. Marietti, 1952.
- Arnzen, Rüdiger. «De Anima. Paraphrase Arabe Anonyme.» In *Dictionnaire des Philosophes Antique, Supplément*, édité par Richard Goulet, 359-365. CNRS éditions, 2003.
- Black, Deborah L. "Estimation (Wahm) in Avicenna: The Logical and Psychological Dimensions." *Dialogue* 32 (1993): 219-258.
- Black, Deborah L. "Imagination and Estimation: Arabic Paradigms and Western Transformations." *Topoi* 19 (2000): 59-75.
- de Callatay, Godefroid. "The Classification of Knowledge in the Rasā'il." In *The Ikhwān al-Ṣafā' and the Rasā'il An Introduction*, edited by Nader El-Bizri, 58-82. Oxford, New York: Oxford University Press, 2008.
- Endress, Gerhard. "The Circle of Al-Kindī, Early Arabic Translations from the Greek and the Rise of Islamic Philosophy." In *The Ancient Tradition in Christian and Islamic Hellenism*, edited by Gerhard Endress and Remke Kruk, 43-76. Leiden: Research School CNWS, 1997.
- Frank, Richard M. "Some Fragments of Ishāq's Translation of the de Anima."

- Cahiers de Byrsa*, no. VIII (1958-1959): 231-251.
- Galen. *On the Affected Parts*. Translated by Rudolph E Siegel. Basel, München, Paris, London, New York, Sydney: S. Karger, 1976.
- Galenus. *Compendium Timaei Platonis*. Edited by Paulus Kraus and Richardus Walzer. London: Aedibus Instituti Warburgiani, 1951.
- Galenus, Claudius. *De Locis Affectis*. Vol. 8. In *Opera Omnia*, by Claudius Galenus, edited by Carolus Gottlob Kühn. Leipzig: Officina Libraria Car. Cnoblochii, 1824.
- Gohlman, W., ed. *The Life of Ibn Sina*. Translated by W. Gohlman. Albany, 1974.
- Ḥunain Ibn Ishāq. „Über Die Syrischen und Arabischen Galen-Übersetzungen.“ Herausgeber: G Bergstässer. *Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes* XVII, Nr. 2 (1925).
- Ibn al-Nadīm. *al-Fihrist*. Edited by R al-Māzindarānī. Beirut: Dār al-Musayyirah, 1988.
- Ibn Sīnā. *al-Mabda' wa al-ma'ād*. Edited by A Nūrānī. Tehran: Institute of Islamic Studies In Collaboration with Tehran University, 1984.
- . *al-Shifā': al-Nafs*. Edited by Ibrāhīm Madkūr. Cairo: al-Hay'ah al-miṣriyyah al-ʿāmmah li-l-kitāb, 1975.
- Ibn Sīnā. “al-Taʿliqāt ʿalā ḥawāshī kitāb al-nafs li-ariṣṭū, li-ibn sīnā.” In *Aristū ʿinda ʿarab*, edited by ʿBadawī. Kuwait: Wikālah al-maṭbūʿāt, 1947, 1978.
- . *Avicenna's De Anima (Arabic Text) being the Psychological Part of Kitāb al-Shifā'*. Edited by Fazlur Rahman. London: Oxford University Press, 1959.
- Ibn Sīnā. “Mabḥath ʿan al-quwā al-nafsāniyyah.” In *Aḥwāl al-nafs*, by Ibn Sīnā, edited by Aḥmad Fuʿād Ahwānī. Paris: Dar BYBLION, 1952, 2007.
- Ikhwān al-Ṣafāʾ. *Fī anna al-insān ʿālam ṣaghīr*. Bd. 2. In *Die Abhandlungen der Ikhwān es-Safāʾ in Auswahl*, von Ikhwān al-Ṣafāʾ, Herausgeber: Fr Dieterici, 454-475. Leipzig: J. C. Hinrichs'sche Buchhandlung, 1886.
- Landauer, S. „Die Psychologie des Ibn Sīnā.“ *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, Nr. 29 (1875): 335-418.
- Meyerhof, Max. *The Book of the Ten Treatises on the Eye Ascribed to Hunain Ibn Ishāq*. Cairo: Government Press, 1928.
- Rowson, Everett K. *A Muslim Philosopher on the Soul and its Fate: Al-ʿĀmirī's Kitāb al-Amad ʿalā l-abad*. New Haven, Connecticut: American Oriental Society, 1988.
- Themistius. *An Arabic Translation of Themistius Commentary on Aristoteles de Anima*. Edited by M C Lyons. London: Bruno Cassirer, 1973.
- . *In Libros Aristotelis de Anima Paraphrasis*. Herausgeber: Richardus Heinze. Berlin: Typis et Impensis Georgii Reimeri, 1899.
- . *On Aristotle's On the Soul*. Edited by Robert B Todd. Ithaca, New York: Cornell University Press, 1996.
- Walker, Paul E. “The Ismāʿīlīs.” In *The Cambridge Companion to Arabic Philosophy*,

edited by Peter Adamson and Richard C Taylor, 72-91. Cambridge: Cambridge University Press, 2005.

Wolfson, Harry Austryn. "The Internal Senses in Latin, Arabic, and Hebrew Philosophic Texts." *Harvard Theological Review* XXVIII, no. 2 (1935): 69-133.

Yaḥyā ibn 'Adī. "Yaḥyā ibn 'Adī ve Neşredilmemiş Bir Risalesi." Edited by Mubahat Türker. *Ankara Üniversitesi Dil ve Tarih-Coğrafya Fakültesi Dergisi*, no. 14 (1956): 87-102.

イブン・シーナー 『魂について 治癒の書 自然学第六篇』 木下雄介訳. 知泉書館, 2012.